

Y21a 地域連携を通じた教育普及・科学史調査 – 日本初のロケット発射場、秋田の場合

阪本 成一 (国立天文台), 小菅 京 (東京工業大学附属科学技術高校), 関 啓亮 (秋田大学)

戦後まもなく再開した日本のロケット開発は2015年で60周年を迎えた。1955年4月12日の国分寺でのペンシルロケット水平試射を皮切りに、同年5月から6にかけては千葉にあった東大生産研の施設で地上実験を実施、同年8月には秋田県の道川海岸(由利本荘市)で打ち上げが行われている。しかしながら現在は国分寺市にも千葉市にも由利本荘市にもJAXAの研究開発拠点はなく、特に科学館のない国分寺市と由利本荘市では宇宙をキーワードにした教育普及も限定的である。科学史の面でも、日本の宇宙開発黎明期の史料が十分に引き継がれず、散逸する恐れがある。そこで、人間であれば遺暦にあたるこの機会を利用して、地域との連携を図って教育普及につなげるとともに、科学史的な調査を行うこととした。

由利本荘市で10月17日に行ったロケット打ち上げ60周年記念イベントでは、ペンシルロケットや道川から打ち上げられ海上回収されたベビーRロケットなどの実機展示とともに、記念講演とパネル討論を行った。会場には当時の状況を知る地元住民が多数参加し、さまざまな情報が寄せられたほか、当時の写真資料などの貸与を受けることができた。参加した地元住民からの要請にこたえる形で小惑星にmichikawaと命名する提案を申請(2015年11月)し、良好な関係を築くことができた。

また、報道を通じてベビーロケットの初期の機体と思われる資料が個人宅から発見された。

講演では地域との連携を通じた教育普及や科学史調査の事例を報告する。